

令和4年度 磐田市立豊田中学校 学校評価書

重点	目標・取組	評価指標	自己評価	考察・改善策	学校関係者 評価委員から	
授業づくり	◎学びの実感を味わう授業 ○9年間の学びの連続性を意識した授業 ○つけたい力を明確にした主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	授業の内容がよく分かれると答える生徒 85%	B	83%	○教師と生徒の間関係が良好で、生徒自身が前向きに授業に取り組んでいることや、教員一人一人の教材研究も、生徒の「わかった」につながっていると考えられる。タブレットの使用は昨年よりも増え、教師が意図的にまとめたり伝えたりする機会も設定していることで、おおむね良好である。反面、自ら調べたりわからないことを自ら解決したりする力が低い傾向にある。知的好奇心や自己解決能力、探究心が高いとは言えないことが「受け身」の学びになっているのではないかと感じる。 ※今年度の活動を踏まえ、以下の点をさらに充実させる。 ・教員と生徒の良好な関係を維持しながら授業を展開する（安心感のある授業）。 ・各教科で生徒に学び方を伝えていくとともに、問題解決的な活動や協働的な場面を意図的に設定し、「伝え方」の工夫も指導していく。 ・理解不足の学習内容の調べ方や聞き方を教えていく。また、単元構想を充実させ、生徒の知的好奇心や探究心をくすぐる授業を展開する。	・地域貢献活動（10月6日）は地域の自治会館や神社、交流センター等の清掃など、外部からの反応が良かった。 ・地区のさまざまな行事や催し物への参画も気持ちが良い。 ・幼稚園でも受け身な児童が増えている。主体的に遊べる工夫をしていきたい。 ・学校で安心して生活できることは大切なことで、生徒の自己評価の高さから学校への信頼感が伝わってきた。 ・自転車交通マナーの向上を望む。 ・中学生にとって地域での活動は社会人になってから必ずや活かされる。今後活動も充実させ、意味のある活動に定着して欲しい。 ・おおむね目標を達成でき、落ち着いた学校生活が送れているように感じる。出席率もよく、楽しい学校生活になっていることをうれしく思う。 ・一校校としての交流が深まるとさらによい。 ・中学校を「楽しい」と答える生徒が87%もいるのは驚いたし、素晴らしいと思う。しかし、13%の生徒に対してはどうされているのか。
		タブレットなどを使ってまとめたり伝えたりできると答える生徒 80%	B	79%		
		進んで先生に聞いたり自分で調べたりすると答える生徒 80%	C	67%		
仲間づくり	◎互いに思いやり、高め合う仲間 ○互いにつながり合う仲間（心の居場所づくり） ○ともにやりぬく仲間（絆づくり）	学校は楽しいと答える生徒 95%	B	87%	○本校では、生徒にとって魅力ある学校づくりを目指し、「心の居場所づくり」と「絆づくり」の2本柱を中心とした生徒指導を行ってきた。具体的には、①どの生徒も安心して生活でき、自己存在感や自己有用感を得られる居場所をつくること、②日々の授業や行事において、全ての生徒が活躍できる場面を設定し、生徒自らが「絆」を感じ取り、紡いでいくことを目指した教育実践を行うこと、この2点を学級経営の軸として学校全体で生徒指導を進めてきた。 生徒の振り返りを見ると、概ね目標を達成できたと考えている。落ち着いた学校生活が基盤となり、生徒自身が主体的に学校生活へ参画していると考えられる。これまでの指導を継続しつつ、一校校の良さを生かして小中間の交流をさらに充実させるなど、子供たちにとってより希望溢れる一校校を目指していきたい。そして、学校が楽しいと感じる生徒の割合を増やしていきたい。 ※今年度の活動を踏まえ、以下の点をさらに充実させる。 ・小中間交流の中身の充実。 ・交通ルールやマナーの順守、徹底。 ・進んでさわやかなあいさつができる生徒の育成。（いつでも、どこでも、誰にでも）	
		自分の学級は互いにルールを守り、協力する雰囲気があると答える生徒 85%	A	86%		
		進んで挨拶をすると答える生徒 95%	B	94%		
		出席率 95%	A	96%		
志づくり	◎志カリキュラム ○9年間の学びから志をもつ ○未来や社会につながる「志タイム」 ◎志を実現する4つの力 ○かかわる力 ○見つめる力 ○やり抜く力 ○かなえる力	下級生（7年生は小学生）の手本になろうという意識がある生徒 85%	B	79%	○今年度は、新型コロナウイルス感染拡大に注意しながらも、例年並みの活動（7年生の志インタビューや地域探訪、8年生の職業体験活動）を実施することができた。生徒にとって、「対面」で実際に話ができることや、「現場」で活動できることは大変有意義であり、大きな達成感や充実した学びの時間を得ることにつながったと感じる。 9年生では、新しい試みとして天竜厚生会施設内での実地研修を計画した。残念ながら、コロナの影響により実施することはできなかったが、4つの力を身に付けるために、様々なアプローチを考え取り入れていく姿勢は、今後も大切にしていきたい点である。また、9年生においては、地域貢献活動として、自分に何ができるかを考え、活動を行った。その結果、左記評価項目（「地区行事や交流センターの講座等を通して、地域の方々関わっていると答える生徒 75%」）で目標値を達成することができた。このことから、「実感」を味わうことのできる活動の重要性を改めて感じた。 「下級生（7年生は小学生）の手本になろうという意識がある生徒 85%」では、生徒の声に耳を傾けると、意識はあるが他学年と交流する機会に限られており、自分が意識できているかどうか自信がもてないという意見が聞かれた。年々、イベント等を通じて中学校内のみでなく、小中間での交流も進んできている。来年度は、総合的な学習の時間を通して、小中の交流も始まる予定である。どの生徒も胸を張って「下級生のお手本」として躍動する一校校を目指していきたい。	
		将来の夢や目標をもって学校生活を送っていると答える生徒 80%	B	72%		
		地区行事や交流センターの講座等を通して、地域の方々関わっていると答える生徒 75%	A	77%		
		難しいと思うことにも失敗を恐れずに挑戦していると答える生徒 80%	B	71%		

学校関係者評価を受けてのまとめ

地域の方々にはコロナ禍にも関わらず、本校の目指す教育に御理解いただき、地域貢献活動や職業体験、地域探訪等、さまざまな総合的な学習の時間を使った活動で御協力いただいた。3本柱の1つである「志づくり」には地域との連携が不可欠で、地域の理解と協力なしには成立しない教育活動である。これらが「授業づくり」や「仲間づくり」により影響を与えているので、地域への感謝を深め、これからもこの教育活動を継続していく。

大きな課題は、ここに数値としては出ていないが、一校校及び学府としての小中間交流の促進である。磐田市唯一の一校校のある学府として、今までの教育活動にとらわれない、新しい学校を創造していくためにも小中間交流は欠かせない活動になる。今年度までは「ながふじモールイベント」を中心として、また、「ながふじ音楽祭」を初めて小中合同で行い、小中間交流を育んできた。来年度は小学6年生と中学1年生が総合的な学習の時間での交流活動を予定している。これらをきっかけとして、より活発に小中間交流をしていきたい。

